20011242

厚生科学研究費補助金
医療技術評価総合研究事業

看護職における男女共同参画の課題と可能性に関する研究

平成13年度　総括研究報告書

主任研究者　矢原　隆行

平成14（2002）年3月

目　次

Ⅰ．総括研究報告書

看護職における男女共同参画の課題と可能性に関する研究 ―――――― 1
矢原隆行

Ⅱ．研究成果の刊行に関する一覧表 ―――――― 25

Ⅲ．研究成果の刊行物・別刷 ―――――― 26

厚生科学研究費補助金（医療技術評価総合研究事業）
総括研究報告書

看護職における男女共同参画の課題と可能性に関する研究

主任研究者　矢原　隆行　福山市立女子短期大学専任講師

【研究要旨】

日本看護協会が平成 11 年に発表の統計によれば、1996 年の時点で、看護職就業者（准看も含む）全体である 97 万人余りに占める看護士（准看護士も含む）の比率はわずか 3.6%。また、そうした男性看護職員のうち約半数は、精神科病棟への配置という偏った状況にある。しかし、近年、男性の看護職への進出は、量的にも増加、質的にも多様な領域への広がりを示しつつある。従来、看護職、介護職等ケア・サービスを行う職業領域は、典型的な女性的職業として、その多くが女性によって担われてきた。この背景には、家庭における女性役割を含む社会構造に深く刻まれたジェンダー構造の存在があるが、膨大な量の看護・介護問題を考えるとき、家族にせよ専門職員にせよ、男性がより積極的に看護・介護に従事することなしには、真の意味での男女共同参画社会の到来はおぼつかない。

しかしながら、看護・介護といったケア・サービスに男性が関わろうとするとき、そこでは社会的レベルにおける課題（職業としてのケア・サービス職の社会・経済的待遇の問題）、心理的レベルにおける課題（職業にまつわるジェンダー観の固定化の問題）、身体的レベルにおける課題（ケアの場面での身体接触に伴うセクシュアリティの問題）といった多くの課題に直面せざるを得ない。本研究は、量的および質的な社会調査の手法を総合的に駆使し、従来ほとんど省みられることのなかった男性ケア・サービス専門職をめぐるそうした現状を広範囲に把握するとともに、彼らが抱える諸課題を明らかにし、当該職業領域におけるより有効な人的資源の活用を可能とする方策について検討を行うものである。

A. 研究目的

従来、看護職、介護職等ケア・サービスを行う職業領域は、典型的な女性的職業として、その多くが女性によって担われてきた。この背景には、家庭における女性役割を含む社会構造に深く刻まれたジェンダー構造の存在があるが、膨大な量の看護・介護問題を考えるとき、家族にせよ専門職員にせよ、男性が看護・介護に従事することなしには、真の意味での男女共同参画社会の到来はおぼつかない。他方で、未だ少数派とはいえ、これらの領域に進出する男性の数は近年、着実に増大している。

こうした社会的背景をふまえ、本研究においては、広範囲に男性ケア・サービス専門職をめぐるマクロおよびミクロな現状を

把握するとともに、そこで彼らが抱える諸課題を明らかにし、より有効な人的資源の活用を可能とする方策について検討するための基礎的資料を得ることを目指す。具体的には、男性ケア・サービス専門職に焦点をおいた質的（おもに今年度）および量的（おもに次年度）な実態調査を行い、わが国の看護・介護職における男性活用の現状における課題と展望について具体的に検討するための資料を得る。

したがって、今年度における研究目的は、次年度計画の量的調査のパイロット・スタディとして男性看護・介護職をめぐる諸議論（人々における語り、メディアにおける諸言説、先行研究等）について、質的方法によりデータを収集、検討することである。

B. 研究方法

研究目的においても述べたように今年度は、次年度計画の量的調査のパイロット・スタディとして、1）男女看護・介護職関係者への面接調査、2）男性看護・介護職者をめぐる従来の諸議論および先行研究のレビュー、を実施した。

1）の面接調査は、おもに 2001 年 9 月～2002 年 3 月にかけて、スノーボール・サンプリングおよび理論的サンプリングにより抽出された年齢、経験年数、勤務施設、地位（学生および既退職者も含む）等多様な男女看護・介護職関係者 80 名（地域は九州地区を中心に他地区も含めた全国の 10 都道府県）を対象とし、集団面接および個人面接の形式で行った。面接方法については、おもに面接場面に対する社会構築主義の観点から Holstein,J.and Gubrium,J.による active interview の方法を参考とした。

2）の男性看護・介護職者をめぐる従来の諸議論および先行研究のレビューについては、おもにこれまでの国内の看護・介護系学会における当該テーマに関わる報告、および学会誌、商業誌等における論文、特集記事、等を包括的にレビューするとともに、それらの研究者のうち、直接面談が可能である者については、面談の上、当該テーマについて討議を行った。

（倫理面への配慮）

・調査におけるインフォームド・コンセントの実施～調査の際、事前に調査研究の意図およびデータの処理方法を明確に説明した上で、調査対象者個々人に調査協力への同意を確認した。

・プライヴァシーの保護～調査実施においては、研究結果の公表に際して調査協力者の匿名性が保持されることを明記、明言するとともに、データの保管に関しては主任研究者の責任において細心の注意を払った。

C. 研究結果

1）男女看護・介護職関係者への面接調査

［職業ライフステージによる男性看護職者の語りの類型］

①進路選択段階

事例①－1：

「そうですね、市役所に入って、環境整備というか、ごみ問題か何かの職に就きたかったのですけど、入る前にこけまして、だめでした。だめだったので、実際その、不況のあおりを受けて、公務員の募集が異様

に。」
――倍率が高かったの？
「倍率が非常に高くて、そこに割込めなくて、3 回目の挑戦はちょっとやめて、別の方面に変えようかなと。で、考えた結果、奉仕活動的な方が自分には向いていると思ったので、看護職というのを選びました。」

事例①－2：
「特に高校生の時から看護士になりたいとかいうのはそんなになくて、とりあえず大学か公務員とかいうのがあったのですけど。まず最初、リハビリの先生に、リハビリの方に進もうと思って。」
――何療法とか。
「理学療法。」
――理学療法士、はい。
「の方に進もうというか、結構、詳しくは知らなかったのですけど、楽みたいなことを。全然知らなかったのですけど、そういうことを聞いて、とりあえず理学療法士の方に行ければと思っていたのですけど、やはり倍率とかがすごく高くて。で、同じ受験科目でつぶしていって、で、看護士になったというふうなのですけど。」

事例①－3：
「ちょうど私、高校卒業して、私の道としては教員の道を選びたかった。で、もちろん頭が若干足りなかったもので一浪しないとだめだと。で、一浪しないとだめっていうか、その頃ちょうど遊び盛りで、勉強はしたかったと。でもお金も若干欲しかったっていうところで、いろいろこう母と話したりしたら、ちょうどその母の友人の息子さんがちょうど看護士をしてあって、で、その方が結局、今でいえば医師会、看護学校、そういった学校に行きながら、そして働きながら給料がもらえるよと。将来的にも医療従事者だったらいいだろうというような勧めがあって。私も看護士の仕事っていうのは全くどういう仕事っていうのは分かんなかったですけれども。入った動機というのは勉強しながらお給料が貰えて、仕事内容も何か精神科ですからソフトボールを一緒にしてあげたりとか、あとは入院している方とほとんどのレクレーション的なものをやれば、やるような楽しい仕事だぞと言われて、それで何も抵抗なく看護士の仕事を選んだっていうのがですね。」

事例①－4：「高３の秋までは、理系、高校で理系だったんで、工学部とかあと船とかそっちの方向に行く予定だったんですけど、何かふと医療関係の仕事、友達が医療関係の学校に行くっていってたので、悪くないなと思って、募集要項とかをとったりして、本とかを見て、放射線技師になる予定で、あの、色々願書とって、願書出して、受ける予定だったんですけど、他にもあと救急救命士とか、そっちの方にも願書出したんですよ。で、あと看護士っていうのもあるって、そこの調べてる途中で知って、でもまあ頭の中では最初の二つが上で、一応願書、看護学校だけ出したんですけど、ここが一番試験が早くて、ここを受けて、もう3月卒業、高校卒業した後に、前の二つは試験があるんで、ここの受験終わって、合格発表があった後に受験があるんで、センターもどうせ悪かったし、ここ受かったって

ことでどうしようかなと迷って、もう受験せずにここ来たんですよ。まあ、そういう理由ですね。」

事例①－5：
「看護学校を決めた影響としては、やはり母親が看護婦という影響が一番強いかと思います。だから、家族側も別に反対することはないのですけど、やはり学校側の先生が、やはり看護学校を今まで辞めた例が多いのでというので、男性は続かないだろうと反対をずっとしていたのですけど。」
――高校の先生が。
「高校の先生がですね。でも、親が推してくれているから行こうかなと思って。」

事例①－6：
「まあ、4 年のころにですね、父の、父がちょっと病気したもんで、それの関係で、でちょっとなんかしてあげられないかなって思ったのとあとは、友達、そのバイクがすきだったもんでですね、バイクに乗ってた友達とかが一人が事故にあってしまって、車椅子になったもんですから、それの、そういうのがなんかこうきっかけで、こちらの道を考えるようになって。で、丁度就職難だったんで、で、普通の公務員、丁度公務員とかの不祥事とかも相次いでたんですよ。でなんか、普通のなんか事務系の公務員になるのもなんかそういう見方をされるのもいやだなって思って、おばが看護婦をしてたもんですから。相談したら、今看護士って言う道も、それまでは全然看護士って言うのは知らなかったんですよね。で、看護士っていう手に職をつけて、就職したらいいんじゃないかって。みんなの役にもたてるしっていうことで、で、そっちのほうを考えるようになって。」

事例①－7：
「その頃ちょうど、うちの親父が肝臓の肝硬変が異様にひどくなって入院したのですよ。で、医療系の知識を身につけることで、先々役に立つかなと思ったのもあります。ただ、親戚一同、医療系は全然いません。全くいないです。接点なしですね。でも、友達の家が整骨院をやっていて、そこに友達の兄貴が家を半分継いだような感じで働いているのですけど、その人からちょっと情報は入ってきていたのですよ。看護職で男の人は少ないから、就職口はあると思うけどとか言っていたり。」

事例①－8：
「ええと、大学は経済学部にいたんですけど、ちょうど就職活動のときが、まぁ就職氷河期の真っ只中で。で、U ターン就職を、まぁ関東の大学だったので、こっちに就職しようと思ったんですけれど、あんまり。まぁいい大学でもないので、こっちで仕事を探すにしても、あまりいい仕事もなく、どうしても経済学部を出ていると、企業実績とか収入面とかばっかり追いかけて仕事を選んでたんですが、その中で、おじいちゃんがいきなり亡くなって、ちょっと、何かこういった仕事の探しかたで一生を自分がやれる仕事を探すというのは、何か淋しいなと思って。お金だけじゃなくて、他にやれる仕事はないかなと思って。」

事例①－9：

「自分はちっちゃい頃ですね、心臓を悪くって手術とかを受けているのですよ。その影響も多分あると思うのですけど。で、一応、高校を卒業して大学受験の時にですね、福祉の大学とか受けてみたのですけれども、ちょっと失敗してしまいまして。で、全然関係ない大学に進学したのですけれども、そこでアルバイトでこちらの病院でお風呂入れのアルバイトですかね、それがあって、それでちょっとこちらにお世話になっていたのですけれども。で、そこで初めて看護士ですかね。その存在を知ったのですけれども。で、4 年間こちらでお世話になっていて、結局、何か自分もこういう仕事やってみたいなっていうか、ちっちゃい頃のやっぱりそういう経験がありましたから、そういうことをやってみたいなっていうことがあって。」

事例①－10：

「もう、親は何も言わんどこうって決めとったっていう話を近頃しました。で、まあ、看護士になるなら、ああ、もう、好きにし、っていうかんじで。だったんですけど、まあ、その今になって聞くと、もう、この子は何を考えとっちゃろうかって思ったっていうことは言ってましたね（笑）。」

――え、その何を考えとるっていうのは、どういう。

「ていうかそのメジャーじゃない？看護士って、はー、そんなんもう、っていうかんじじゃないかなと思いますね。」

事例①－11：

「おじさんが○○出身なんですけれども、本当に下町育ちみたいな方で、その、学校に来るのに責任者というのがありますよね。そのハンコをくださいって言いに行ったら、「これは男のやる仕事じゃないんじゃないか」っていうのを最初に言われました。」

②学生段階

事例②－1：

「えー、あれじゃ。あの、入って 1 人だから、まあ最初のうちは皆女性だからうまくコミュニケーションが取れなくて、そもそも学校自体が友達もいなくて面白くないじゃないですか。まあ、はっきり言ってそうだったんですよ、入った頃は。で、他の、高校の時は皆部活の友達やら、色々男の友達はいっぱいいたんですけど、今となっては、もう二人くらい、○○にいっしょに進学で来ている人くらいしかいなくて、その最初も大学に進学しているから忙しくて、遊ぶ機会もなくて、朝起きて学校に来て帰って、それの繰り返しでなんかもう、楽しみが無くて、もう、いつのまにか頭の中には、こうこの学校をやめるんやろうなっていう考えしかなくなって、それを考えて、もういつやめようかって思ってる、思っていたんですけど、それを考えるのが一番辛かった」

事例②－2：

「やっぱ、僕もコミュニケーション。普通だったら話し掛けるところで話し掛けれない。男の人やったら絶対相談するなぁってとこで話し掛けれないから、やっぱ情報不足やなぁっていうのを感じて、それは先生

達からすれば、聞けばいいやんって感じやけどなかなか聞けない、ことがありましたね」
――聞くっていうのは、同じクラスメイト？
「隣の人でもやっぱり、ちょっとしたことやったら聞きづらい。なんか大事なことやったら聞けるけれども、ちょっとしたことやったらちょっと聞けない。」

事例②－3：
A「技術練習っていってもグループ、病棟ごとにグループを組むんですよ。で、その組んだ中で自由に練習しなきゃいけないので、時間作って、その時にやっぱり皆練習しようとする時に、自分から俺やりたいけんちょっと患者さん役やってとか言えないし、向こうも、あたしやりたいけん（学生B）君ちょっと患者さん役やってよとか言えない、からちょっと自分は練習しないまま見て終わったとか。それがしょっちゅうあります。それが練習しないままテストとか。それがもう演習できないんですよ、相手がいないから」
――技術練習というのは具体的には、どう、清拭とか？
A「そういうものです」
B「あと導尿とかね」
A「もうそういうレベルになってきたら、男と女の関係だからやっぱり、こう遠慮」
B「ちょっと遠慮するね」
A「遠慮するっていうかダメっとか言われるんですよ、なんかもうA君どうするのって先生から言われるんですよ」
B「先生から？」
A「じゃ、A君は、先輩呼んでくるからとか」
B「あっ、それテストんときじゃない？」
A「そう、練習の時とか、練習できませんもん」
B「あー」
――人形とか
A「あー、人形あります。人形じゃ練習ならん」
B「そうそう、人形じゃ練習にならんもんね」
C「練習にならん」
A「しかも、人形だったら、人形と自分じゃないですか、自分の思ってるままに拭いて終りじゃないですか、誰もこう言ってくれる人がいないから」
C「声掛けも絶対せんもんね」
A「もう、黙々とやるけん」
C「黙々とするしかない」
A「試験のとき絶対言われるから、もうちょっと声かけしてやった方がいいよって」
B「そんな、人形に声かけしてやりよったら怖いやろ」

事例②－4：
A「でも、全て、何か行動、何か行動するときは女性がメイン。」
B「更衣室もコピー室だもんね。」
A「そうそう。女子更衣室はすごい立派なんですけど、男子更衣室は何か物品倉庫みたいな、3畳ぐらの部屋で、」
C「10人詰められて、」
B「とりあえず、っていう感じ。」
A「で、先生に「服を片付けなさい」って言われたんですけど、置くところがないんですね。冬だから着るもの多いじゃないです

か。掛けるところも限られるし、しょうがないからコピー機の上におもむろに置いていたら、「片付けなさい」って言われて。」
C「あははは。」
A「「教室じゃないんですから」って。」
B「女子は立派なのがあるのに。」

事例②－5：
A「他の看護学校でも、僕の友達の女性なのですけど、やはり男性がいたら、1回、やはりそうなってしまったら、うっとうしいとか、もう辞めればいいという考えが強いらしいのですよ。」
B「いじめ。」
C「いじめや、それ。いじめや。」
A「辞めさせるように無視するとか、だからもうどんどん、どんどん追いやられていく。
C「追い詰められるね。」
A「だから回復ができないというか、立ち直るのが難しい。」
C「立ち直れないよね。」
B「そうだよね。男子が自分1人とかだったら、もう逃げ場もない。」
C「逃げ場がないですよね、本当に。」

事例②－6：
「しっかり、大変。情報収集がしにくい分だけ、えらいこう、男子学生は力がいると思います、落ちこぼれるというか弾かれないために、こう自分が休んどった時何が授業で行われとったんだろうって考えたり、相手に気に入られるように接してみたり」
――クラスの中で
「えらいこう、看護、男子学生でやっていってるということ自体がある程度コミュニケーションがうまくて、あと要領がいいところがないとやっていけないような気がします」

事例②－7：
「まあなんかあの、実習の練習とかがあったときですね、あの、やっぱり、男だったら、まあ当然かもしれないけど、カーテンで区切って全身をふく練習とかしたんです。あとは実習中では産婦人科の実習ができないというか、あの妊婦さんの許可があれば入れるんですけど。帝王切開の手術だけですね。産褥室にはもちろん入れないしですね。産褥室、あの生まれたあとのお母さんの部屋にも入れなかった、新生児室ばっかりであかちゃんを沐浴させてばっかりで、そういうところ。あとは。若いお嬢さんはもちろんなんですけど、あの、おばあちゃん方から時々、看護士さんに体拭いてもらうのはって遠慮されるときがありましたね。」

事例②－8：
A「補習実習でおじいちゃんだったのですけど、清拭をやったのです。そうしたら陰部の清拭で、男やから全然恥ずかしくないもんねという感じで、自分でばっと下ろして拭き出したけど、看護婦さんやったらちょっと恥ずかしいもんねとか言っていたから、男の方がいい場面というのは患者さんが男の場合はあるのじゃないか。」
B「僕も1年生の時、その短期の実習があったのですけど、受け持ちの方が男性の方で、男性の看護士さんだから言えるのですけど、ちょっと陰部の状態がというのがありまし

たね。看護婦さんだったらなかなか言えないというふうに。あと先生、ドクターの方もいつも来るとかいう訳ではないから、先生にもなかなか言い出せないで。」

事例②－9：

A「産科の病棟の実習の時に、そういえば婦長さんに、男性だからできること、父性的な看護というのを、もっとあなたが考えてやればよかったというのを最後言われたのですよ。父性的なものが何かいうのが、まだ全然、分からないですけど。」

――父性。どうだろうね。よく言うよね、そういう看護、看護というもの自体は非常に母性の仕事として今まで作られてきたけど、看護士も例えば、入院していたらそういう父性的な存在も必要だとかそういう父性の役割を担うものとして、看護士もいて、いる必要があるのだという議論があったりするけど。父性って、では、どんなものかね。父性的な看護。

B「父性的な。昔、学校のビデオか何かで、赤ちゃんが父親に対する態度と母親に対する態度が、態度というか、その期待するものが違うということで、どういう動作をしているかということで、何か実験というか、観察があっていたのですけど。赤ちゃんが父親に求めるのは遊んでほしいというので、舌が動くとか、目がどうのこうのとか言っていたのですけど、その学者が言うには、この動きは父親に対して遊んでほしいということを望んでいるということで、あと、母親に対しては安らぎか何かを求めている、あと空腹感とか、そういう時に母親を求めていると言っていたのですけど。看護にどういうふうに生かせるのかというのまでは分からないですね。父性と母性。難しい。その婦長に聞いてみたいよ、俺は。産婦人科で父性をどう生かすのですかと。」

事例②－10：

「僕は、やっぱり二分化していいところはしなきゃいけないと思うんですよ。例えばやっぱり技術練習とかでも学校の先生が手本を見せるときに、ちょっと、あの、やっぱり上着を脱がなきゃいけないという時は、やっぱり、その学生さんのプライバシーもあるから、そういう上着を脱がなきゃいけない実習の時はやっぱり、別にして、あの、こっちにも教えるこっちにも教える。何かあの、今は上着を脱ぐときは、今男子学生さんがいるからちょっとやめとこうね、みたいな感じになってるんですよね。そういう時は、ちゃんと二分化して、二分化しなくていいところでは、ちゃんと、あの一人でまとめてやればいいな、と思ってるんですよ。ただ、二分化したいと思ったときにちゃんと二分化できるようなシステムを、もう一人先生連れてくるとか、そういうのを作ってもらいたいなと思ってます」

事例②－11

「で、僕らもやっぱり女の人ばっかりやけん、どげんしていいかわからんけん、行きたくないっていや、行きたくないんでですね。だからむこうももうそんなふうに思ってあれば、まあ仕方ないかなとは思いますけど。婦人科の人たちってほとんど男やないですか。おんなじやろって思いますけどね、やっぱ医者なんかこう、診察でばーっ

と回ったら終わりやけど、やっぱ看護するもんって常にそこにいますよね。でやっぱこう、目障りっていうんか、僕にはこう、女ばっかりのところに男がポツンとおったらやっぱあの、やりにくいっていうのもあるんでしょうけどですね。そういうのがあったと思うんですけど。なくなっちゃって。でもですね、あの、ちょ、僕と同じ年のお母さんやったんですけど、あの、まそこは婦人科じゃなくて新生児のほうだったんですよね。まだ子供生まれたばっかりでその僕と同じ年のお母さんで、最初その新生児室実習にいってたときに、あの、母乳の時間がありますよね、母乳の時間が。あのときやっぱこう、あの、母乳をのまなくて、でないっていったらおかしいけどその、やっぱこうミルクをあげてる子供がいますよね。そういうとこにいってたんですよ。たら、その、あるお母さんって言うのは僕と同じ年のお母さんやったんですけど。まあ年聞くまで全然わかんなかったんですけど、持ち出して子供抱えてぼくのとこられるんですよ。でそれでそのこう、話してたらですね、その年が同じってことが分かって、でその、まあ僕は途中から行ってるから一人で年ですよね。で、そんなまあ途中からその、トラバーユし、やってそんなまた一からやり直すなんてすごいねとか話し、なんここうえらいこう、感激じゃないけど、されたみたいで、で、平気でこうお乳飲ましたりなんなりされるんで、で、ばあーって話してその変な感じじゃないんですよね。やっぱこう話すからですね。回りのお母さんたちもわかってくれて、僕がいようがいまいがこう平気でお乳やられるようになったことがあったんですよ。そういうの考えたら、あ、そのへんなこと思わんどけばはいっていけるんかなっていう。思ったんですけど。はい。」

③スタッフ段階

事例③－1：

――じゃあやっぱり実際自分で動かれてみる範囲ではやっぱり男性をとってくれる病院自体がまだまだその、大きいところではそんなに。

「はい、もうなかったですね。だから、せっかく看護士になったけどなんやその、あの、世の中じゃなんかこう、やれ、女性の消防士が誕生しただの、やれあの、女性の自衛官が誕生しただの、いろいろ騒がれおるのに、いや、俺ら看護士になったけどまだ入っていくとこがないじゃないかって思ったのが。一番印象的だったですよね、はい。」

事例③－2：

「僕はなんかその、職を探したのは、○○に来たときが初めてなんですよ。あとはもう、みんな、そんなに探したって感じじゃないから。でも、○○のときも、やっぱり自分自身の中で、その、ここは行ける、ここは行けないていうのをもう割り切ってるんですよね。んだから、ここが行けないのはおかしいとか、いうふうに思ったことがあんまりなかったんで、そんなに、それについて気分を害したりしたことはなかったですね。でも、そういうのがあるのは事実ですよね。」

事例③－3：

「珍しか、ようこんなんなろうと思ったねとか言われますよ。こんな女がするこたぁ仕事ば、年寄りの人はやっぱりこうね、女がすることばようするね、男が一生することば仕事じゃなか、とかね。」

――それは看護婦さんですか、患者さんですか。

「患者さまです。言われたりするので、あぁそうですかね、自分はこうこうこういう意味ですごくやりがいがあるし、いいと思うのですけどって。」

事例③－4：

「まあ、20いくつで看護士の免許をとったときには、さほど抵抗なかったことでしたので、例えば、わたし結婚して今度自分の子供できて、で、正直な話、障害児のところで働きながらですね、ああ自分はいくつまで、例えばその、婦長になる、なると転勤はあるんですが、自分が婦長になるなんて思ってませんでしたので、あの、自分はいくつまで、例えば定年の60まで障害児のおむつ交換をほんとにやってるんだろうか、やれるんだろうかっていう自分の子供ができて思いましたね。でそのとき少しちょっと困ったなと。ああお父さんの仕事はなんなの？っていわれたときに、ほんとに誇らしげに子供に言える、こんな仕事をしてるよって自分の子供に言えるだろうかっていうのはちょっとあの、考えたことでした。まあだけど実際はあの、もう子供も大きくなりましたが、そんなのはいらん心配でしたね。よく理解してくれてますしね。」

事例③－5：

「あ、あのー、やっぱこうお年寄りの患者さんなんかですね、ま、もったいないとか、そのやっぱこういろいろこうしてやるじゃないですか。ま、もったいなかけんよかっとか言うてですね、いや、そうじゃないよってもう、おんなじことせないかんっちゃけんそげん言わんでいいよってことはよくありましたけどね。」

事例③－6：

「んー、やっぱり同じようにお年寄りの方でも、男の人は嫌って言われる方はいるし。ましてや若い人、若い人とかだったら。僕ももうその病棟に３年おるから、もう大体この患者さん駄目じゃろうなって分かるから。もう、そういう時には他の看護婦さんにお願いしていう形にはなってはきてますけどね。」

――駄目じゃろうなって言うのは大体年齢とかで？

「そうですね。やっぱり２０代、３０代。４０代でも、もう大体頭がしっかりしてれば、もう拒否しますね。」

事例③－7：

「婦人科の病気とかになる人とかっていらっしゃますよね。うん、子宮のない人にはわからないからって時々いわれることありますよね。うん、それ一回じゃないですもんね。何回か言われたことありますもんね。」

――うん、実感ができないでしょうということですかね。

「うん、実感ができないでしょっていう。

ま、そりゃその通りなんですけど、ね、分かるような努力はしてるんですよと。勉強もしてるんですよっていう。でもまあ、ね、患者さんが納得するか、してくれるかどうかちゅう話ですから。」

事例③－8：

「患者さんの困ってる部分でのその調整役に入ってみたり、相談をうける立場になってみたりしますから、ある意味その、逆に喜んでいただけたりしたようなケースもいっぱいあったと思いますね。まああの、よく言われるのが、あの、看護婦さんより看護士さんのほうがやさしいですよね、っていうようなことはですね、もう正直、ほんとに何人の患者さんからもいわれました。それとかあの、頼もしいですね、っていうようなことでその精神面を言っていただくような方もいらっしゃますし。反面その、がっかりするのが、あー力仕事だからですねっていわれるのにはがっかりしますね。」

――あ、看護士さんがいる理由というのがですね。

「あー、力仕事が大変だからですねっていわれるのには、おいちょっと待ってくれって思うのが正直ありますね。」

事例③－9：

「今ほど薬も良くなかったですしね。要はあの頃は本当、暴れるっていうか、治療も今と違いますしね。閉鎖の病院が多くて。で、本当、○○先生が言っておられましたけど、用心棒的に雇ってある病院もありましたですね。やっぱり患者さんの必要があるっていう意味じゃなくて、すごく凶暴なところがですね。だから柔道部、空手部OBとかですな。それとかレクレーションの時、本当にソフトボールしてお金が貰えるとかいう感じで。とにかく本当にあの、安易っていうか、そんなものも何もなくて、それぞれ目指すものもそれぞれでしたね。はい。」

事例③－10：

「今回のケースでいくと、うまくその意思表示ができないような方でしたので、病気の影響でですね。でうまくこう、伝えられない。しかし何か言いたいんだろうなって思ったのが、ナースコールが頻回になるんですね、で、そのつどその、こういうことなんだろうっていうことで対応はしてきてるんですけど、それでもナースコールがやまないから、あの、言えないんか、言えないことがあるんじゃないかと、男にはいえないことがあるんじゃないかって。まあその辺察してバトンタッチしてみたらどうやっていうようなですね。話でしたけどね。」

――なかなか、まあ患者さんに確認して向こうにはっきり決めてもらえればまだあれでしょうけど、こちらからある程度察して動かないといけない部分っていうのはかなりある？

「ですね。まあ特にその、恥ずかしいところの部分については、聞くにも聞けないっていうところがありますからね。もうそれはこちらが先に患者さんの気持ちを察するなり先回りして、この方がいいんじゃないかって言って、手を打つのがやっぱり必要だろうと思いますからね。恥ずかしい思いをさしたら、いけないと思いますからです

ね。」

④指導者、管理者段階

事例④－1：

「そうですね、あの、指導するときにはそのえと、冗談、女性同士だと、なんか冗談で済むようなところが、うんと、冗談じゃなくて怒ってるみたいに思われるときも、まあそれは私のパーソナリティなのかもしれないですけどね。」

――男性が言うとちょっときつく？

「きつく聞こえる。聞こえるっていうところがあるのかもしれん。また反対に、なんかこう、言ってる、しっかり言ってるつもりなんだけれども、なんかまた冗談に聞こえてみたりとか。でもそれはまさに俺たちのパーソナリティでしょうね。だから。」

――結構加減が難しい？

「加減が難しいですよね。はい。」

――ああ、そのへんは女性同士だとある程度加減がお互い分かるということなんですかね。

「お互い加減が分かってるんじゃないでしょうかね。難しいですよね。うん。指導、うん、どうなんでしょうね。でもやんなきゃいけないことはやんなきゃいけないので、どっちかっていうとこう、マイナス的に怒ってなんとかかんとか言うよりも、男性の場合女性に言うときは目標だとかをしっかり言ってですね、ここはこういう方針なのでこうやっていこうよ、みんながどうがんばってくれるのとかっていう、そういうふうなやり方でやる分にはよくついてくれると。ついてきてくれるというふうに思いますけど、うん、だから細かいことを一つずつこう、逐一チェックして、言うっていうのはうん、あの、男性から女性に対してっていうのは日本の風土なのか九州の風土なのかもしんないけど、なかなかむつかしい気が。で、細かく、細かいんですよね、この仕事。とっても細かくて細かくやんなきゃいけないんだけど、なかなかできにくい。うん。」

――そういう細かいところを指導する分には女性に指導してもらったほうが

「せまい方がいいですね。ここはこういうふうには思うんだけど、こういうふうに、彼女にいってくれないかって。男性の場合ならお前、なん、ちょっとこいと、頭でもたたいときゃそれで済むんですけど。」

――ああ、やっぱり男女で指導の仕方が。

「あ、そりゃ全然違います。そりゃ。夜遅く電話かけて、ちょっとこい。酒のみながら話そうっていうのも女性にはできませんし。はい。」

事例④－2：

「まあそれぞれ伸ばしてやりたいと思ってますから、ただどっちかっていうと、ある意味看護士のほうに、看護士に対してのほうが厳しいかもしれませんね。男だったらこれぐらいやれと。」

――それは結構期待する部分もある？

「期待する部分もあってていうことで、好意的にとらえていただくとありがたいですが、ですから、男だったらこれぐらいって言われる前に先に動けみたいな、しかしまあ相手が看護婦だとやっぱりその辺はちょっとやっぱり遠慮してるのかも、遠慮っていうか気を使ってるのかもしれません、あ

の。その辺は少し噛み砕いたような形で話したりしますからね。」

事例④－3：

「以前経験をしたことでわたしが一度あの、怒ったことがあるんですが、あの、やっぱり同じ看護婦って言う免許をもって働いてる看護婦のなかにもですね、看護婦さんの中にも、何かがあると、あの、まあ極端な話力仕事になると、あの、すぐ男性にちょっときてきてと。男性でしょっていう方はいらっしゃますね。もうそんなん男性よ、男性の仕事、男性だからそんなの当たり前よっていうようなことをいう。じゃあ反面今度は、違うことを女性にしていただいたら患者さんが楽だろうなってことを依頼すると、あの、おんなじ免許でしょ？っていうわけですね。で、ちょっと話が違うんじゃないかと。で、そういうことでわたしは一度、それはあまりあからさまに出すなというようなことを当時あの、婦長になってからですが、それはもう私にいったわけではないんですよね、そこの周りに何人かいた看護士に対してのその発言なんかを聞いて。それはあまりその、言い過ぎると、よくないと。いうような話をしたことはありました。まあ自分に言われてるような気も半分したんでですね。まあそんなんがありましたね。」

事例④－4：

「どうかっていうと、10人看護婦と私含めていれば、免許は同じな訳ですよ。当然、あなた男やけんとか言われるのがプレッシャーになったり、それとか自分がこれをやろうかとした時に、なんですかね、上下関係じゃないですけど、リーダーシップをとろうとした時にとりにくい面がたくさん出てきますですね。だったら専門性でやるしかないのじゃないかと。更にもう一つ上をいく、それくらい向上していかないとあれかなと思ったりしますですね。ただ、そういって、看護士は専門化していっているのじゃないかなと思いますですね。同じ役職にある人だって看護士の免許プラス何かをもってどんどん資格を持っていっている。そうしないと、周りが認めていても看護士自分自身のアイデンティティーが保ちにくいような気がします。」

事例④－5：

「臨床とか、看護士に対しての期待は、私が経験した時でも大きいですよね。女性の職場の中で男性が入っていたら、確かに臨床の病棟を選ぶし。確かに期待は大きいと思います。その期待に応えられるくらいの、力量と、また力と、それからさきほど言った何か求めているものがあれば、これからの看護士って伸びると思うのですけど。入った期待が外れていれば、それなりの仕事も全然全くしないは、じゃ、やはり同じような中にうもれてしまって。これは男女差別になるかもしれないけど、本当に超一流は男性がほとんどなのですよね。全ての、料理にしても男性がトップにたっているし、医者も何でも、男性っていうのはやろうと思えばトップにたてるくらいのそういった力があるので。まだまだ看護界の中で、実際には看護協会もまだ女性がたっている。それは女性が立ち上げてきたっていうそう

いう歴史もありますけど。やはり看護士っていう形では、一看護士の部分っていうのも確かにそれはそれで本人がよければそれもいいのですけど。やはりその中で求められているものっていうのは、私は臨床からの声は本当は大きいのだって思うのです。それを自分が感じて、やはり努力して、何らかの自分なりの形をつくっていかないと、それは看護婦でも看護士でも看護職員っていう形で自然と気づかない内に一緒になっている。今だからこそ、看護士がどんどん増えているので、今のうち何かアピールしていかないと、本当に、どこにいたのとかいるのとかいう感じで、本当に同じような感じで。看護士っていうのもやっぱり今からそのぐらい、目立つっていうのはおかしいですが、自分自身何かを確信もってすると、少数ではありながら外国のような形、いろんなポストについてどんどん引っ張っていけるのじゃなかろうかと思うのですけどね。」

［女性看護職者による男性看護職者をめぐる語りの類型］

⑤期待

事例⑤－1：

「私はもう、○○から彼らが入ってくる十年くらい前から看護士をいれてほしいってずーっと、あの、そのへんですね。上の先生にはいえないから、周りにはいっぱいいってまわってたんですけど、あの、役所が、そういう役所というか病院というか、してないので、してないというか、多分されてなかったと思うんですよ。受ける人がいなかったかどうか私知らないんですけど。で、それは何故かっていうと、よそで、もうたくさん看護士の方が手術室という場所で活躍してあったので、もう是非、あの何…、女性は結婚して出産とかあるじゃないですか。そうなるともう、入れ替えが多くなる？だからあの、そういう意味ではあの、男性が入ってきてもらったほうがなんか、うん、あの、レベルがこう、下がらなくてすむかなと思ったりしたんですよ。だから私はそれぐらい前からずーっと思ってました。ちょっとそれはもう、一個人のあの思いですから、どうにもできなかった、どうにもできないんですけど。」

事例⑤－2：

「友達で話をしたときに、その男性にあー、女性にない見方をするっていうんで彼女も、その一緒にその人は一緒に働いてるんですよね。」

――あ、その方も看護婦さん。

「看護婦で。えっと看護士さんと一緒に働いてるんですよ。彼、彼女が言うには女にない違った見方をするからすごく考えさせられるっとか。そういう彼女は肯定的な意見を私に言ったので、なるほどっていうことで、そういう意味で期待感。それとあと、現実的な問題として、あのICUでいつも問題になるのは、ま、ちょうどその頃もだった、まあ問題だったんですけど妊娠して産休、育休っていうのがあるんですよね。で、どうしてもそれが突発的にきますよね。予定では来ない・・・ある日突然ていう形でくるんで、あの新人がいっぱい入ったときとかの年は非常にそういうのが突発的にぽ

んって入ってくると、あのとてもきつくなるんですよね。だから、そういうのがあるから、ある見方では男は産休がないからいいって思いました。はっきりいって。だから、あの、まあ今男も育休とれるようになったから・・・」

――そうですね。

「あの、もろてをあげてはちょっと違ってきたかなとは思うんですけど。でも、ま、とっさにはそれ思いましたね。ちょうどその頃２人ぐらい続けて、さん・・・2人か3人こうだだっと、こう産休に入った人がいたので妊娠したら、まず夜勤しなくなるんですよね。ほとんどがICUの場合夜勤きついんで夜勤はしないっていう申請をすると、うち、スタッフそれでなくても〇〇人しかいないんで、あの夜勤の回数が病棟に比べて多いんですよ。で、えっと平均でも９回１０回になりますから。ましてや、夜勤しない人が出てくるとか、あと移動の時期とかいうのは、もう皆下手すると１１回とか１２回の人が出てくるんですよね。で、仕事はきついは、夜勤は多いがっていうのがICUの一番の不満なわけですよ、スタッフの。で私は主任だから、あの夜勤回数皆より少ないんですけど、それでもやっぱりそういう時期になると少し私の回数も増えるんですよね。だから、あのそれがやっぱり一番。で、そこにおまけに、こう例えば、こう産休の、あの「妊娠しました。できません」っていう風にいわれたりすると、さらに上がる場合もあるんですよね。だからそういうの、そういうたまたまそういう時期続いた時期だったから、あ、男は産休がないからいいってやっぱり思いました。」

――あー、ほんとに。

「とっさに。だって夜勤しない時期長いんですよ。今、２ヶ月３ヶ月で妊娠が分かっちゃうとそれから産休に入って・・・ま、それから半年間の間ずっと夜勤しないわけだから。それと、あと夜勤しないとなるとなかなかICUの中の仕事もクレームがくるんですよね。あれができない、これができないっていうふうに。で、そうなるとあのーもう、大体ICUの場合は外来に出てるんで外来に出てもらうっていう風になったりとか、仕事がかなり制限、その人１人いると。それが２人になる時もたまたまその頃２人だったんですよ。」

――あー、はぁー。

「だから、気分的には男は妊娠しないからいいって思ったのは確かです。」

事例⑤－3：

「話してみて、話してみたら女の顔の看護婦さんも看護士も一緒だと。特別変わりはないのだなと思ったのですよね。ただ看護士さんということですごく期待していた部分はあるのです。」

――期待というのはどういう感じの期待ですかね。

「結局少々きつくても我慢して働くというふうな部分ですよね。主人たちを見ていても休んだり年休って取ったりとかはないですものね。」

事例⑤―4：

「印象。んー、あのーどっちかといえば女性ばかりの職場なので。」

――はい。

「緩衝剤的な役目になるかなーっていうことで。私個人としては、男性入ってくるので・・看護士さん入ってくるので「嫌だなー」とか「どんなんだろうなー」っていうよりは良い感じですかね。良い印象でっていうか考えてましたけど。」

事例⑤―5

――男性の看護職の方と女性の看護職の方で、やっぱり看護の仕方とかで、やっぱりこの辺は男性の特性だとか、逆にこっちは女性の得意な場とかそういうのは何かありますかね？

「そうですね。お風呂の時とかに、体の重たい患者さんとかをストレッチャーとかに移すんですけど、その時はやっぱ男性の職員の方がいたほうが頼りにはなります。そう言ったらいけないのかもしれませんが。」

事例⑤―6

「患者さんでいました。何か、その人はもう触るんですよ。」

――寝てるのに。

「寝てるのに触るんで。多分、まー、頭の病気からくるものもあるだろうし、元々から何か、そういう何か元気なときからその女の人にちょっかいを出すキャラクターだったらしいんですけど。そういう方が居て、でも誰かれそうするんで、女のスタッフ自体がすごいもう皆が嫌いだったんですよ、その方のことを。だから、もう何か、触ってきそうだなっていうが分かるんで、そういう時は触らないでって言って押さえたりとか、跳ね除けたりとか。もう何かだから、そういう時は何か男性だったらそういうことはないんで。」

――あははは。

「あははは。しないんで、もう何か患者さんのトランスとか移動とかはその男性のスタッフがいたらちょっとお願いしたりとか。」

⑥不安・不満

事例⑥－1：

「まあいい人が入れば病棟の雰囲気もかわるし、まあこどもがお兄さんって、お兄さんおじさんて形で喜ぶってこともあるし、その子供にとってはあの、おかあ、あの看護婦はおかあさんお姉さんやくだけど、看護士さんてのはおにいさんお父さん役？やっぱり二人両方いたほうがいいって話とかいろいろ聞いてましたので、まいずれの段階で入れたいなっていうには思ってたんですね。で、んー、でもその人たちがみんな言うには、男性はやめないと。だから、そのヘンな人がくるとほんとに病棟の雰囲気おかしくなって、でそれがずっと続くから。あの、入れるにあたっては人を選ばないとっていう話をずっとされてましたので。」

事例⑥－2：

「その時の感じというのはよく、きちんとは覚えていないけれども、どんな方が来られるのだろうかという感じではありますよね。で、看護士さんになる男の子ってどんな人なのだろうと思いますよね。で、来てから、来られてから、やはり男の子と女の子と働くという感じになりますでしょう。そうするとやはり１番に思ったのは、仕事だからきちんとしてもらうというのはいい

けれども、プライベートの時もやはり仕事の延長という形にはなるから男女関係とかそういうのがあっては困るなというのは一番に思ったのですけれど。そこのところはちょっとどうかなと思いました。」

事例⑥－3：

「そうですね、今まで看護学生の男の人とか入って来た人を見ると何か優しい人といいますかね、何かそんな人が多いような気がするのですよね。そういう時に好き嫌いの激しい中学生とかですね、小学生、生意気な小学生とかだったらかえって反発を受けるかもしれないし。」

事例⑥－4：

「例えばですね。一番最初に感じたのがえっと患者さんが病棟に上がっていくとそのベッドのとか、患者さんが使ったものとか、えーお掃除をするんですけども、そのお掃除の仕方にやっぱりビックリしましたね。だから、明らかに掃除をしたって思えないような・・・。テーブルの上とかもコードが、こうぐちゃぐちゃっとなったままだから「掃除をしたのか」っていう風に確認したら、「しました」っていう風に答えられた。そのときになんか、女の掃除っていう感覚からと、男から見た掃除っていうのは違うのかなって。女の人がいくら掃除しないっていっても、一応こういう公共の場であの一感染防止という名目があって色々するわけだから、まあその（一部不明）うんぬんはともかくとして、その丸くしてしまうって男の人からとってみれば、普通したっていう風に部類にはいるのかもしれないけど、女の人だとやっぱり今までいろんな人を教えても、そのぐちゃぐちゃってなってるコードはきちんとやっぱりまるめてそこのテーブルを拭くとか、ということをやるはず・・・。要するに上拭きと下拭き用があるわけですよ。ちゃんと用意されてるんですよ。ということはやっぱりあの一上はこれで拭いて、モップはこっちを拭いてとかしますよね。だから、その辺でその、まあ床は拭いたんでしょうけど、そのテーブルの上がそのぐちゃぐちゃってなってるまんまのところを見て「しました」って言われても「ほんとに？」っていうふうな。それがやっぱり一番最初に感じたことですね。掃除のしかた・・・掃除っていったときに、うーん。男性から見た掃除をしたって、するっていうのと女性がするっていうのはやっぱり違うのかなって感覚が。それはちょっと一番最初に感じたことですね。」

事例⑥－5：

「とくにあの一心臓でもえっと１年未満とか新生児とか年齢の小さい子の手術が非常に多いんですよね。そういうときに、あの一気配りようするに子どもへの気配りとか、あとあのお母さんたちとか両親に対する気配り。とくにうちの場合、母親がいてお父さんは最初の手術の時のには来るけども、長くなってくると母親だけが面会にくることにどうしてもなってくるんで母親への気配りとかそういう気配りがやっぱり男と女の差なのか、それともその個人の問題なのかね、資質の問題なのか。そのへんは最近ちょっと悩みの種ですね。で、とくに、あの特徴的に心疾患をもって、その新生時期

っていうようなときは、まだこう女の人は罪悪感を持ちますよね。こんな心疾患に・・・うん、生まれて、生んでしまったとかね。そういうやっぱり時期っていう、あの一時に、こう手術、手術って感じでもう、で、し・・・危険率がってとかいうような時にお父さ、その辺が気配りがちょっとって思う時がやっぱり。面会時の子、はん、面会・・・直接面会してくる時なんかに看護婦がお話したりとか、もちろん先生もお話するんですけど日常のことは看護婦がお話したりするんですけど時々こう観察・・中に仕事してると観察したりするんですけど、まだ仕事になれてないから出ないのか、それとも、まあその辺はちょっと今、最近はどうすべきかなっていうのはちょっと感じてますね。今、２年目・・・まあ１年目の人はともかく、まだ仕事に慣れて、完全に慣れてないんですけど２年目の方はもう１年経験があるのに、あの一親との会話がうまく、どうもいかない・・・。そこはちょっ・・・とは本人の資質も彼は関係してると、あるんだろうなとは思うんだけども。それと、あと子どもに慣れないですね。慣れるスピードが、あ、慣れ方がその、すく・・・あ一遅いというか。おん・・・女の人に比べると遅いんじゃないかなっていうのは思います。特にうちの場合子どももあの一多分今の看護学校も、そう、がそうなんでしょうけど。小児実習だけですよね。あと、保育園実習とかがあるらしいんだけど、皆年齢が学童期を対象にしてるんですよね、どうしても。だもんだから、だと思うんですけど新生児の対応が、わ・・・全然駄目なんですよね。で、だから多分看護婦と比べる、比べるっていうと唯一比べるのはやっぱり多分新生児をあやす時に、そのあやし方がやっぱり違う・・・。うーん、ていうのは感じます。あやしても、言葉が出ない。声掛けが出ないんですね。年長児だと話すでしょ？だから、コミュニケーションがとれ・・・お話できる子どもだと多分いいんですよ。生き生き仕事してますから、ICU でも。だけど、あの一言葉が発せられ・・・でない子どもたち。１歳未満とかもっと年代ちっちゃい子、なればなるほどもう、てい、ないた時にただひたすらとんとんあやしたりとか。あの一、あやしかたがワンパターンですね、見てて。それが悩みの種でもあるんですけど。」

事例⑥―6

「それで、あの一そこの性的なところでの区別っていうことに関しては、私らも今管理者ですので、あの、考えるのはですね、配置のとき考えますね。どういうことかと言いますとね、女性が多いところには配置できないという。例えば小児科はですね、若いお母さんたちが多い。付き添いが多いんですね、同室入院が。ということで非常に、あの一もう奔放な姿を、日常生活が、あの一病室ですので。そういう意味で、男子学生は実習は来ますけど、夜のことを考えればやっぱり男性の配置を今ひとつ考えてるんですね。それで今のところ男性を配置しているのが精神科と、これはもう昔から精神科は看護士いますから。あとは手術部ですね。手術部と言いますね。それから集中治療部ですね。」